



福井市職員労働組合が自治研学習会を開催

塩尻市役所の山田崇さん、斬新な活動を語る

福井市職員労働組合は1月25日、福井駅前の新栄商店街にあるニシワキビルで、塩尻市職員の山田崇さん(塩尻市企画課シティープロモーション係)を招いて学習会「あなたが変える、あなたのまち」シティープロモーションの開催を行いました。市役所の若手職員をはじめ、まちづくりに関心のある一般市民など約60名が参加しました。山田さんか



県自治研センター 第25回定期総会開催

新年度は「ブロック別学習会」を企画

福井県地方自治研究センターは2月22日、鯖江市「文化の館」で第25回定期総会と記念講演会を開催し、約90名が参加しました。新年度の活動方針では、今年度の新企画として5月から7月にかけて県内45箇所地元関係者と協働しながら「ブロック別学習会」を開催する方針などを確認しました。また、これまでは個人会員の会費が2,000円だった規約を今年度からは1,000円に改正し、幅広い個人会員の拡大をめざすことも決定しました。

総会後は富山大学の林夏生准教授による、「LGBTと自治体の役割」多様性に富む社会づくり「自治体だからできること」とは「をテーマとする記念講演を行いました。その中で、最近の全国各地でのLGBTに関する自治体や市民活動の実例を紹介しながら、主に以下の視点から話をしました。

・「LGBT」だけが性的マイノリティではない。この人たちだけを特別扱いすることは、他の人が当たり前という前提になっていることにつながるのではない。人間のセクシュアリティのあり方は極めて多様である上に、境界もあいまいである場合が多い。

・自治体だからできることとしては、①究極例としての「新しいパートナーシップ制度」の導入。②市民や企業、団体、教育機関等に対し、率先して「多様性の尊重の必要性を呼びかける。③「多様であるがゆえの困難」を抱えた市民に対する、公共サービスにおける配慮。などがある。

・今すぐできることは、①セクシュアリティの多様性やマイノリティが抱えている困難について、講演を聞いたり資料を読んだりすることで正確な知識を得る。



②日常の業務や生活の中、また日々目にする報道やテレビ番組の中で、性的指向、性自認に関する「偏見に基づく行動」から「いじめ」がおきていないかどうか、敏感になってみる。③業務を通して、また日常生活の中で、性的マイノリティ当事者からカミングアウトをされた場合、自分ができるような対応を取りうるのか、その中でどのような対応を自分として「望ましい」と考えるのか、あらかじめコミュニケーションしてみる。などがある。

この記念講演を聞いた参加者からは、「初めて聞くテーマだったが、今までの自分がまったく知らなかったり、誤解していたりしたことがよく分かった」、「テレビなどでは聞いたこともあったが、自治体職員としてもっと真剣に考えなければいけないと認識した」、「自分の市役所の中でも学習しなければいけないと思った」などの感想が寄せられました。

なお、講演の前には昨年10月の宮城全国自治研集会で優秀賞レポーターとなった越前市職員組合の緒方祐さんから、活動報告もありました。

大野市で自治研学習会を開催

「来たい！住みたい！戻りたい！そんな大野にするために、大野を愛し、自信を持って、活動しよう」をテーマに、40名が参加

大野市職員労働組合は3月10日、「来たい！住みたい！戻りたい！そんな大野にするために、大野を愛し、自信を持って、活動しよう」をテーマに自治研学習会を大野市「結

とぴあ」で開催し、約40名が参加しました。

学習会では、「KISUMO小浜Iターンプロジェクトリーダー」の馬場淳子氏と「奥越前まんまるサイト」代表の坂本均氏が、「移住と定住」、「自然体験」などの活動報告を行い、その後、福井県地方自治研究センター副理事長の伊藤藤夫氏をコーディネーターとして3名によるシンポジウムが行われました。

その中で、馬場さんは東京から小浜の魅力に惹かれて移住した経過を語り、小浜の魅力については、「地元の人気が付いていない恵まれた豊かさがいっぱいある」、「風光明媚な自然景観の中で季節を楽しみながら流れるゆったりした暮らしぶり」、「小浜の人たちは、飾りがなく温厚でやさしい人々。役所やスーパー、金融機関などが集中してミニマムシティとしても暮らしやすい」、「新鮮な食材などは驚くほど安く美味しく」、「生活経費は東京よりも格安で豊かな生活が出来る」などと紹介しました。

また、馬場さんは、空き家ツアーを実施していますが、都会からの参加者には、「家の外観だけでなく、住んでいる人、地域の空気、人々の暮らしを感じてもらおうようにしている」と述べた後、「地元の人たちに

は、こんなに素晴らしい所だということを再認識してもらい、自信をもつてほしい。大野にも有名な水資源や伝統文化、観光地なども多いのだから、ぜひ皆さんも自信をもって暮らした豊かさを積極的に内外にアピールしてほしい」と話しました。

大野市で活動している坂本さんは、六呂師高原を中心とした自然環境活動や子どもたちとの体験活動、農業、移住などの実例を紹介しながら、「自然を生かした体験活動を創る。そして、体験を提供することだけを目標にせず、何を伝えるかを明確にしながら、そのための行為目標、工夫、想いを大事にしたい」と述べた後、「大野は四季がはっきりしている。多くの人に戻って来いよ」と言えるような自然がある。各世代の色んな体験活動を継続する中で、住民に大野の魅力が伝わり自信を持てるようになるのではないかと話しました。

また、行政職員の心構えとして、「相手を受け

入れ、すべて歓迎する心が大切。窓口では笑顔で対応してほしい。また、市民団体の移住や地域活性化の活動はすべて無償の活動だから、役所側もそのモチベーションを大切に受け止めてほしい。まずは、市民と触れ合い、地域や暮らしぶり、自然環境、文化などに関心を持つ。そして、人を引き込み、仲間をつくる。公務員が元気になれば地域が元気になる、そうした意識をもって頑張してほしい」と話しました。

